

# 三つやの光



林化経院

## 聖き ぎ 國くに

天親菩薩願生偈五念門のこころ

ハ 調四分四

3 5 6 5 | 1 2 6 5 | 5 5 1 6 | 5-0  
 いつく— しみなる わかちよ

2— 2 2 | 2 2 3 2 | 1 1 2 6 | 5-0  
 みむねに そむきて われわれ は

## 和偈の巻

### 禮 拜

(即ち歸命救ひを求むるため己なき、けて拜服す)

大慈なる吾如來よ  
 始なき無明にさまよひて  
 みおやの愛いとふかく  
 召喚の聖聲に驚きて  
 悔あらためて恩寵に  
 身をも意も歸命なり  
 すべてを聖旨に任すなり  
 心を致し身をつくし

聖旨にそむきて我くは  
 罪にほろびし身なれども  
 迷子をことに惑みし  
 いまは心も覺にける  
 至心に歸依したてまつる  
 救ひの聖手を垂たまへ  
 大慈懷に攝めませ  
 聖前に禮拜奉つる

### 讚 歎

聖き光を讚賞して聖旨に相應せんことをいのる

アー、讚むべき如來の  
 あらゆる佛陀もまかさつも  
 アー、聖なみかりかりよ  
 聖きみむねに稱はせよ  
 清き光はいさぎよく  
 智慧の光に聖くはし  
 我等が染汚を洗きては  
 げに、讚むべきみ光の

げに不可思議のみ光は  
 みな悉く稱へしと  
 我らが罪をかき消して  
 正義みむねに相應せかし  
 歡喜の光は安らかに  
 斷えぬ光はいとも靈く  
 聖き心になされかし  
 如來を稱へ奉る

### 作 願

聖意の顯はれと靈國の格らんことをいのる

聖なるみなを崇めては  
 如來の上なき恩寵を

聖旨の顯はれ祈るなり  
 いま我が意に満しめよ

如來の神聖なるみむね  
如來の正義なるみむね  
至真にしていと靈き  
至善にしていと靈き  
至美にしていと靈き  
我をすべてのひとぐさと

いま我が心を照しませ  
いま我がこころにあらはれよ  
みくにを此に格れかし  
みくにを此に格れかし  
みくにを此に格れかし  
安き處にあらしめよ

觀 察

冥想觀念によりて知見を興へらるゝ

聖き啓示を被りて  
清きみ天は朗らかに  
雲にそびゆるたかどのは  
るり寶石の莊嚴は  
七の寶の池見れば  
こがねの沙はきらやかに  
寶の樹に玉の枝  
みそのに遊ぶ樂みは  
天つ乙女は雲をわけ  
みそらにひゞく聲きかば  
日々に六たびの花の雨  
きしの山ぶさきながらに  
三味の窓に座をしめて  
うしつの翠は天にこえ  
こがねの相好妙にして  
巍き威嚴は極みなく

三まやの窓し開くれば  
常住のみ國は現はれぬ  
金銀まに眞珠  
照り耀くこと限りなく  
八の功德の水みてり  
清る面にぞ照徹る  
金の花は咲にほふ  
無爲の都の春ながし  
奏づるしらべ妙にして  
身のをき處も覺ほえず  
金の地にそふりつもの  
何れの色かとまがふらむ  
あふぎまつればアミダ尊  
五山の毫光はがらかに  
月の面は圓かなり  
よろづの徳は満みてり

四

ほさつは妙なる法の身に  
如來をめぐりしよそほひは  
無爲ないをんのさかひには  
大悲こころに薰じてぞ

おのゝ威徳そなはりて  
雲の月をかこむ如と  
のどけさ有無を離れにき  
分身利物の極みなし

回 向

恩寵によりて更生し聖旨の體現をいのる

至真至善至美なる  
聖旨によりて更生り  
さゝげまつりしこの身もて  
恩寵を我にみたしめよ  
神聖眞理のみひかりに  
正義のみむねを體しては  
われに菩提を得せしめよ  
すべてのひとと諸共に

聖きみくには開けにき  
聖子の眞なる我は  
みむねにつかへまつるなり  
我同胞にわかちてむ  
聖き靈となせよかし  
世つぎのつとめを果さなむ  
ひとり己れが爲ならじ  
安寧聖國にいたるなり

六

五

### 如來十二光和偈

(明治三十八年四月四日公刊愛知縣西尾町にて印刷せる佛敎要理問答第二版(第一版には之無し)に附録)

#### 無量光

法身、體大處とし  
て實在せざるなし

清淨法身ビルシヤナ佛

周徧法界一切處

唯一獨尊統攝と

終局歸趣の理體なり

徧空徧時永恒の

自中存在心靈態

絶對無規の實性は

内容無盡の徳を具し

生産門には一切の

知能の權に天則の

秩序は因果の律として

萬物を開きて産生り

攝取門には法身に

智慧と解脱の徳をもて

衆生の心をいらみては

靈化し局に歸趣せしむ

註一——最後の行にある「いらみて」のいは眼植に非ず、方言の訛

註二——明治三十九年三月三十日發行愛知縣西尾町にて印刷せる佛敎要理問答第三版にて「無量光」の下のみを改訂して次に掲げる如くに變更。

無邊光以下には改訂なく、たゞ「智慧光」の下に一字「甚深秘密の實相は」の實相な

「眞相」と改訂あり。

註三——如來三身讚歌には改訂なし

註四——ルビは難讀の箇所或は特殊の讀み方の個所にのみ振りて其他は振りて無けれども自明の讀みなれば以下は編者に於て便宜上全部ルビなつたり、但初よりあるルビは勿論

そのまゝ)

註五——十二光の偈文は此要理問答附録の外に大正二年二月九州にて謄寫せるもの(非印刷)及び大正三年八月公刊淨土敎義(ミオヤの光大正十二年六月號)中のもの及び道詠集所載

のもの各少しづつ、改訂あり。

#### 無量光

法身、體大、處とし  
て實在せざるなし

(明治三十九年一部改訂於愛知縣西尾町印刷せる佛敎要理問答第三版の巻尾に附録せるもの)

歸命無量光壽尊

本體法身ビルシヤナ佛

獨尊統攝歸趣の理に

絶對無規の實性は

超空超時永恒の

自中存在心靈態

内容には無盡の徳を具し

面には顯不の二動あり

生産門には一切の

智能の權に天則の

秩序は因果の律として

萬物を開きて産生り

攝取門には法身に

智慧と解脱の徳をもて

衆生の心をえらみては

靈化し局に歸趣せしむ

#### 無邊光

一切智、相大、處と  
して照さざるなし

一切智相は遊りなく

十方三世色心の

二象は一大觀念の

圓鏡の影像に外ならず

無明の風に隨縁の

波には彼我を隔つれど

平等性智の水澄る

一如の海は不變なり

妙觀察智の寶輪は

甚深難思の秘藏より

重々無盡の内容を

啓きて知見を與ふなり

五識五境はことごとく

本成所作智の作用にて

佛慧の眼開くれば

淨土に有ざる處なし

#### 無礙光

一切能、解脱大、處と  
して融せざるなし

如來無礙の光明は

無上菩提の態にて

世の約束を解脱きては

眞我の自由を得せしめぬ

神聖無上の命令は  
 人の心に儼臨みては  
 如來の正義は我を捨て  
 撰み取ては聖道に  
 恩寵は罪に亡びたる  
 靈を育み聖子として

註—「撰み取」のルビは第二版は「いらみ」第三版は「えらみ」

無對光

如來の眞佛土、  
 人の最終の歸處

無對は如來の自境界  
 至眞至善至美なる  
 もと身心土不二なれば  
 自然微妙の莊嚴は  
 常樂我淨の靈園には  
 衆生は劫火に燒るゝも  
 密嚴淨土不思議なり  
 これ本覺のみやこにて

炎王光

人類の理惑二性のあく  
 質を除きて靈化する徳

炎王の靈能は  
 理惑は無明と所知の雲  
 事惑は實我を固執せる  
 墮ては惡病的惡弊症  
 信不は衆生の性格を

普偏の眞理にましませば  
 道徳自律を規定せり  
 聖意に隨順するものを  
 正義職を果さしむ  
 我らを救靈ひ更生し  
 上なき露福を興ふなり

極樂無爲涅槃城  
 最終眞理の靈界なり  
 常寂光土の天きよし  
 感覺心象麗く  
 靈福と光榮に充滿り  
 靈土は常に安穩に  
 蓮華藏界奇妙なり  
 衆生が最終の歸す處

理事の二惑を除りぬ  
 理性の光りを障ふるなれ  
 排佗の自利に本づきぬ  
 團體瘴氣は同共罪  
 三衆に類を分ちえん

聖旨に背くは邪定にて  
 聖旨に協ふる心靈は  
 二惑の障りいつか霽れ  
 理事の靈性顯はるれ

註—第二版にては第一行の「光炎王」第三版にては「炎光王」

清淨光

人の感性を美化  
 する恵

如來清淨光明は  
 衆生の感性を美化しては  
 心眼内外に映徹し  
 耳には至美の音妙に  
 心舌に味ふ三摩耶の  
 此身は淨き瑠璃の瓶  
 五と塵に交はるも  
 五妙感覺靈界に

歡喜光

感情に靈福  
 を興ふ

凡そ人の感情は  
 潜むる煩惱窟ひ出で  
 世は内外に苦惱と  
 解脱は己が怠ならず  
 神秘融合深遠く  
 恩寵に安立しぬる身は  
 六根常に清らかに  
 内に靈福感すれば

靈象至美の態にて  
 六根淨を得せしめぬ  
 四面玲瓏かゞやけり  
 法鼻に馨る香はきよく  
 甘さを何にたくらべん  
 眞金を盛るが如くなり  
 神は聖き光りにて  
 逍遙として優遊ぶ

智慧光

人の智力知  
現な與ふ

如來智慧の光明は

神祕の窓を開きては

感覺としては光明相

神聖正義智慧の相

如來の自性天真は

甚深秘密の真相は(實相は)

此より無量の總持門

乃し不思議の佛法も

不斷光

意志を  
變化す

如來不斷の光能は

衆生の意志に被れば

主我幸福と俗情の

靈化菩提の志氣きよく

教主の聖旨を體しては

誓は四弘の海ふかく

願作佛とは願度生

一切衆生と諸共に

難思光

信仰を修養して  
恩寵を喚起す

如來不思議の境界は

崇きみ空にあくがるる

甚深不思議の内容を

衆生に知見を與ふなり

依正二象を感見し

三昧の窓に啓示さるる

即ち毘盧妙法身

禪那の床に悟らるる

三昧智慧神通等

示さるるなり悟るなり

無上道徳態にして

解脱靈化の極みなし

非靈の素質を排除きは

聖意現はすすがたなり

二利圓滿を期するなれ

六度八正道ひろし

願度生とは願生心

安寧み國に至るなり

雲井はるかに超絶れば

恩靈をいかに喚起せん

聖經を讀と拜禮と  
工夫冥想觀念と

垢障覆深の身なれども

至心に専ら如來に

招喚の靈聲いと妙に

無明の夢も覺醒し

無稱光

恩寵を開  
發す

神光心靈に照りませば

良心苦悶の度は昂む

恩寵を獲得せん爲に

聖旨の現はれ祈りに

靈應交感いと妙に

心も語も及ばじな

心機一轉即更生

如來の眞我に安立し

更生のルビ第三版「がへり」は第二版では「がいり」

超日月光

恩寵の實現に  
行動す

智慧の光は明らげく

聖旨を被むる聖子として

恩寵の中にたゆみなく

智慧の日月の下にして

教主應化の迹高く

請求感謝の稱名と  
讚嘆供養を靈糧とせば

尅己摧勵切にして

欽慕の心深ければ

微光閃き來るとき

靈の暉日は爲ぬべし

罪惡深きを自覺しぬ

解脱は自己の任ならず

三昧に神を凝しては

七覺靈の花ひらき

神秘融合不思議なり

廓然として覺醒し

永恒の生命に入ぬれば

聖子の數とは成にけり

慈悲のみそらは極みなく

いかに天職を果すべき

上求菩提下化衆生

自佗の利益を勵むなり

五十餘年の健闘と

三輪完徳のみ鑑は  
望は一切と諸共に  
行は聖意の指導にて

我らに摸範を垂給ふ  
至幸の處に伴なはむ  
至善に向て進むなり

二〇

### 如來三身讚歌

(明治三十八年四月四日公刊  
佛敎要理問答第二版附録)

#### 如來法身讚

天則を統一する實體

天つみ空に羅列なりし  
地に生しげる草木より  
天則の秩序が  
萬物を統一攝理ます  
徧時徧空徧一切  
全智の亘らぬ限もなく  
天地萬物を産出し  
唯一獨尊の

敷えず星の運れるも  
生とし活る萬類まで  
善く整齊るさま見れば  
法身の權能を察れける  
永恒自中存在  
全能いたらぬ際もなき  
一切生命を擔保ます  
法身如來を稱へ奉る

二一

### 如來報身讚

萬類を終局に攝取する徳

圓滿報身如來は  
善てふ善の極みなる  
眞金の相好妙にして  
萬徳圓滿にて  
上なき智慧の光りは  
神聖正義のみ鑑は  
恩寵の神名を稱へなば  
三徳圓滿の

眞にて且つ美しき  
聖き靈界に在せり  
巍巍威嚴は限りなく  
照さぬ處なかりけり  
祈る念の窓に入り  
道徳自律の制裁  
攝取不捨を尊とけれ  
報身如來に禮き奉る

二二

### 如來應身讚

人格の身もて世に出でたる教主

大恩深き教主  
うき世の闇に出まして  
雙樹の夜半の終まで  
聖旨に開る法の花  
身にむすびてし威儀は  
光顔は長に麗しく  
内には智慧の徳みたり  
我らに軌範を垂たまふ

八相應化の日のみかげ  
高嶺を照す朝より  
示し給へる迹高く  
金の言の葉は榮え  
六根つねに清らかに  
巍巍稜威は極みなく  
三輪完徳の鑑は  
佛陀を稱へたてまつる

二三

無量光

(大正二年九州にて啓露せるもの)

二四

歸命無量光壽尊

獨尊統攝歸趣の義に

物心無碍超時空

内に無盡の徳を具し

生産門には法身の

因縁因果の律をもて

攝取門には性起なる

世界と衆生を攝取して

三身十佛妙法身

偏依の依たる圓實性

自中存在心靈態

二動と二界の面をなす

一切知能が天則の

自然の衆生を發展す

法般解脱の徳を以て

靈界菩提に歸趣せしむ

無邊光

絶對觀より相對の

萬有無邊の相なすも

一大理系に枝條なし

自治統制の終局は

理感即入相關の

重々無盡の交渉の

五識五塵は業識の

佛慧靈妙の感覺は

物心二象は阿頼耶にて

大圓鏡智の影像なれや

大小萬差個々の性

平等性智に歸する也

識智は一即一切の

靈妙啓示は妙智也

所感は種々に異なれど

能所共に佛智の用

無礙光

一切智能は天則に

大道自然に行はれ

神聖正義恩寵の

天命天恵とはなりぬ

二五

歸趣には無碍の大道が

解脱靈化の用を爲し

神聖無上の命令は

正義は擇善捨惡にて

恩寵は三慈の恵もて

無碍大道の靈力に

三徳不思議の力より

靈我の自由を得せしぬ

道徳律の基にて

至善に向ひて進ましむ

靈を育て聖子とはす

靈化し佛行果さしむ

無對光

背真向妄の衆生等

攝取同化の終局には

無對は如來の自境界

十佛三身まどかにて

常寂光に智慧光土

同體異名は知と情と

絶對圓滿の妙境は

無住涅槃に安住し

相待規定に縛へしも

彼此の相なく無對也

極樂無爲涅槃城

亦身心土不二となる

華藏密嚴妙樂土

譬喩と密語に號く也

一切諸佛の住所にて

常恆度生は自然なり

炎王光

光炎王の靈能は

理感は無明と所知の雲

事惑は實我を固執せる

墮ては病的惡弊症

行不は衆生の性格を

聖意に背くは邪定にて

一切の惑障除こりぬ

理性の光を障るなれ

排佗の自利に基きぬ

團體障氣は同共罪

三聚に類を分ち得ん

天然非靈は不定聚

二七

二六

聖意に協ふ心靈は  
二惑の障除こりて

清淨光

我等が五根は六塵に  
感覺欲は充進し  
清き光に溶すれば  
内に靈光感すれば  
此身は塵に交るも  
五妙感覺靈界に  
五根に各五位ありて  
法慧佛とは靈界の

正定聖聚の員に入り  
理事の靈性顯るれ

まびれて常に汚さるゝ  
習慣つひに病なす

六根常に清らく  
姿色も自と麗しく  
神は聖き光にて  
逍遙として栖み遊ぶ  
肉と天とは自然界  
勝妙五塵を感すなれ

歡喜光

有爲の世に處し幸福を  
世は内外に苦惱と  
解脱は己がまゝならず  
神秘融合最妙に  
眞實勝妙樂をえて  
人天自然の歡樂と  
菩薩の他受法樂と  
如來歡喜の光明が

智慧光

求むに八苦身に逼る  
罪と惡とに充滿てり  
如來の大我に歸命せば  
恩寵の懷に安住す  
法喜禪悅味深し  
二乗の非苦非樂樂  
佛陀自受法樂は  
隨類受用に外ならず

二八

聖旨に背きて無明となり  
識智いかてか絶對の  
如來の知見被むれば  
智悲内包の聖徳と  
三昧智慧陀羅尼門  
人の常識學習智  
二乘出世の真空智  
唯佛與佛の佛智等

不斷光

世界動機と主我の意志  
斯光は衆生を正善に  
如來の三徳加はれば  
無上の道心發しなば  
聖き意に靈化して  
道徳五重の動機あり  
二乗の自利菩薩利他  
常恒度生の靈徳は

難思光

佛性宿因を素地とはし  
知識教化の勝縁と  
至心信樂欲生は  
恭敬、無余問、長時修

迷妄、顛倒、相對の  
如來の妙境測りえむ  
相好光明感覺相  
法身理想の相を觀む  
佛法すべて悟らるれ  
天才自然の發明智  
菩薩一切不空智も  
皆智慧光の所現なり

不斷光

六道流轉の業をなす  
靈化し徳に進ましむ  
廢惡進善自づから  
願作佛と度生心  
不斷の光に行動す  
人天二道の徳よりも  
佛陀無上の菩提也  
不斷の光によればなり

難思光

名號聖種の聞薰に  
思修に信念萌發す  
召喚に報ふ子の心  
正進排雜神足行

三〇

二九

三一



讀誦禮拜觀察と

五種正行の法をもて

渴仰熱精いや昂く

恩寵喚起の機は熟し

### 無 稱 光

瞞れば自己の見と思の

三昧凝神に妄想と

開發に隨信隨法は

七覺三昧に花開き

神秘融合不思議にて

歡喜極なく覺ほへて

此時情換轉換し

聖子の數に入ぬれば

稱名讚歎供養との

靈を養ふ資糧とはす

信念五根に力を得

心靈覺醒は信滿位

罪惡深きを自覺しき

業障重きに苦悶せり

如來の中に我を投じ

三種の知見示されぬ

入我我入の奥深し

真我の中に安住す

靈き我と更生へり

靈格已に備はりぬ

### 超 日 月 光

智慧は靈界の日月にて

作佛度生の願行に

内外兩魔の健闘は

三法の光の照護には

已に靈果熟すれば

恩寵を實現す身となりて

佛子佛心佛行の

同一無量光壽なる

聖子を養ふ父母なり

菩提の心を長養す

靈を琢磨く機會にて

自律謝徳の金剛心

聖種を有縁に分播し

大地のごとくに世を養ふ

佛果十方三世佛

極樂國土に歸趣す也

### 佛教要理問答につきて

佛教要理問答第一版は明治三十七年四月八日發行にて發行所を（建立されし善光寺所在）千葉縣東葛飾郡高木村谷智會とし「右代表者」として原青民師の名のみ掲げ著者の名無く東京にて印刷せるものなり（奥附に發行者なる他名のみ掲げしは御在世御著述に例外なき通例）

十二光和偈及三身讚歌の附録は第一版に無し。

同第二版は明治三十八年四月四日發行にて愛知縣西尾町にて印刷せるもの、内容に大なる改訂あり。且つ十二光和偈と三身讚歌附録す。

同第三版は明治三十九年三月三十日發行にて愛知縣西尾町にて印刷。内容に第一版とも第二版とも異なる改訂あり。特に稱名正行の條下に前二版に無き一問答を加へて稱名中の憶念を諭へ、切實に起行の用心を示せり。ミオヤの光昭和八年一月號要理問答は此第三版を採録せるものなり。附録の十二光和偈にも改訂あり。三身讚歌は第二版に同じ。

以上三種の外に改訂版無し。

附言。以上三種の何れとも文相稍異り十二光和偈及三身讚歌附録無きもの發行者遺書中に収録されたるものあり眞摯なる該書編者の高見を通じて示さる、度生の善巧仰いで大悲に謝するのみ。

昭和八年十月二十五日 印刷  
 昭和八年十月二十八日 發行 (誌代年壹圓)  
 編輯兼 網 山崎 辨成  
 發行人 小石川區關口町六十五番地  
 印刷人 小林七太郎  
 小石川區關口町六十五番地  
 印刷所 靜文社印刷所  
 電話牛込五四一九番  
 東京市小石川區水道橋二丁目四十四番地

ミオヤのひかり社  
 振替口座東京六六八五一番